

カトリック六甲教会 教会報

2008
3

No.435

3月の予定

		教会暦	教会行事
2	日	四旬節第4主日	9時ミサ後 三日月会喫茶
7	金		初金 7:00 10:00 ミサと十字架の道行き
8	土		14:30 教会学校卒業式 六年生卒業合宿
9	日	四旬節第5主日	春の墓参(9時ミサ後) 9時ミサ後 プチトマト公演 11:15 小教区評議会 17:00 海星病院集会祭儀
13	木		14:00 ベタニアの集い
14	金		10:00 集会祭儀と十字架の道行き(共同回心式)
15	土	聖ヨセフ(祭日)	12:30 教会学校2年生一日練成会
16	日	受難の主日(枝の主日) 世界青年の日	7:00 10:00 ミサ 11:00 小教区信徒総会
17	月	受難の月曜日	14:00 三日月会ミサと例会
18	火	受難の火曜日	
19	水	受難の水曜日	11:00 聖香油のミサ(大阪カドラル)
20	木	聖木曜日	19:00 主の晩さん (ミサ中に洗足式)
21	金	聖金曜日(大斎・小斎) 聖地のための献金	19:00 主の受難の祭儀
22	土	聖土曜日	19:00 復活徹夜祭
23	日	復活の主日(祭日)	13:00 侍者会(中高生)
24	月		11:00 ベビーとママの集い
30	日	復活節第2主日 (神のいつくしみの主日)	ミサ 7:00 10:00 (10時ミサ中初聖体と祝福式) 11:00 教会親睦会 17:00 海星病院集会祭儀
31	月	神のお告げ(祭日)	

<注意> 聖なる過越しの3日間は朝7時のミサはありません。

誰に挑戦が必要か？

人生は挑戦だと言われますが、四旬節も信者にとって挑戦です。教会の回心への呼びかけに応えるのは、その挑戦です。

昔の四旬節はいろいろのしきたりによって厳しいものでした。断食の日もありましたし、

食卓に肉のでない日もありました。子どもの時、四旬節の間、何を犠牲にするか、よく強調されました。断食にしても、子どもには年令の免除もありましたが、母はまだ若く、やはり断食しなければならなかった。母は真面目

に朝と昼を少ない量にして、夜には普通の食事をしました。私たち子どもにとって、それは嬉しいことでした。その夕食は何故かとてもおいしかったのです。しかし、8人の子どもを育てる母の生活は、いつも節制の生活でした。

今は四旬節のしきたりが多くなっても、四旬節の挑戦が残ります。イエズス様が言われたのは「私についてきたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私についてきなさい」(マタイ 16-24)その十字架は何でしょうか？ その十字架は自分の現状を素直に認め、忠実にイエズス様についていくことです。自分の現状は何であるか、人によって違います。病気であるか。何が失敗であるか。何が試練であるか。いずれにしても、どんな場合でも気を落とさずに主に信頼して歩いていくことです。

でも、ひとりで十字架を背負っていません。シモンがイエズス様の十字架を、イエズス様と共に十字架を担いだように、あなたの十字架はイエズス様が一緒に担いで下さっています。人生の十字架を背負うのは、自分の力ではありません。イエズス様の力です。だから、どんなことが起こっても、どんな変化が起こっても、主に信頼して共に歩き、共に十字架を背負います。変化を受け入れるのは、ひとつの挑戦です。挑戦にあうのは年令とは関係ありません。子どもでも成長の変化によって、その挑戦に応えなければなりません。

今年4月に、私はひとつの挑戦にあいます。

皆さんお聞きになったと思いますが、4月1日より神戸中央教会で働くことになりました。この挑戦は、今年77歳になる私に必要でしょうか？ 必要かどうかはどうでもいいのです。その挑戦に応えることは、私にとって大切な成長の歩みです。22年前、神戸に来て、六甲教会の主任の仕事を受けたことは大きな挑戦でした。実に不安に思っていました。六甲教会は伝統のある大きな教会でしたので、私にできるかと不安に感じました。今では懐かしい思いです。すべてを主に投げて、できることをしようと考え、皆さんに支えられ、14年間も主任の務めを過ごしました。これからも、新しい場所にあっても、自分の力に頼らず、主の力に支えられて、宣教の活動を続けたいと思います。そのために皆さんの祈りを頼みます。この挑戦に応えるのは、十字架を背負うことになりますが、皆さんの励ましに支えられて、イエズス様と共に歩み続けていきます。長い間、大変お世話になりました。皆さんを通していろいろの恵みを頂きました。感謝いたします。遠く離れてはいませんので、神戸中央教会の近くに立ち寄られたら、訪ねて下さい。20年前の元気さは持っていませんが、与えられた力で頑張っていきたいです。これからも六甲教会の共同体が栄えていって、み国の発展のために立派な使命を果たすことができるように祈ります。では、また会う日まで……。

ジョン・オマリー神父

六甲教会のホームページが

シグニスジャパン「おすすめホームページ6点」のうちの1点に選ばれました。

評価内容は“見やすい。整理されている。情報も適切。”でした。更にトップ10の第4位に位置しています。この順位は皆さんの評価によるものです。評価のできるホームページアドレスは、

<http://signis-japan.org/main/modules/mylinks/index.php>です。

SIGNIS・JAPAN (シグニス・ジャパン = 日本カトリックメディア協議会) とは:

福音宣教にメディアの積極的利用を願う信徒・司祭・修道者の連携の場。事務局はカトリック中央協議会内。幸田和生司教を顧問に迎えるなど、日本の教会の広報にあらゆるメディアを駆使したいとの理念に基づき、ウェブサイトの構築などインターネットの活用について、積極的に取り組んでいる。

人事異動などのお知らせ

主任司祭より

(1) 尼崎教会から戻って5年間、オマリー神父は今までの長い宣教司牧経験を生かし、蔭になり日向になって六甲教会のために尽くして下さいました。その寛大な働きは言葉で言い尽くせないものがありますが、宣教師としての深い魂を燃やしなが、子供たちやその保護者、苦しむ人々や貧しい人々を世話し、病院や刑務所にも通っておられました。この度、大司教の要請と管区長の命により、4月から同じ東ブロックの神戸中央教会に協力司祭として転勤されることになりました。私たちは感謝の心をもって、新しい任地でのご活躍を祈りながらお見送りしたいと思います。

(2) 2005年9月より2年半に亘って、毎週土・日曜日受付や教会学校のために奉仕して下さいましたシスター上田史子さん(マリアの宣教師フランシスコ修道会)は教会の諸事情により、この3月末をもってその任務を終了していただくことに致しました。シスターは教会での働きが初めてだったにも拘わらず、自主的かつ積極的に多くの方々と交わり、リーダー会では遅くまで主日ミサでは早くから奉仕して下さいました。本当にありがとうございます。シスターご本人と派遣して下さいました修道会に心から感謝を捧げたいと思います。

(3) 教会報1月号でお知らせした通り、イエズス会の片柳弘史(かたやなぎ ひろし) 神学生は来たる3月29日(土)東京で助祭叙階を受けて、翌30日(日)初聖体・祝福式ミサから六甲教会に着任します。9月20日(土)東京で司祭叙階の予定であり、教会司祭館に居住してフルタイムの助任司祭として奉仕して下さいます。教会全体のため、特に教会学校・中高生会・青年会・若い父母などのために力を注いでいただきたいと思います。

尚、上記3名の方々の歡送迎会は、3月30日(日)10時ミサ後の「春の親睦会」で行われます。

(4) 新年度4月から、教会3階司祭館には片柳助祭、桜井神父、コリンズ神父(通常、土曜午後～日曜午前)の3名が居住します。教会の北北西に位置するイエズス会修道院「ザビエル・ハウス」(Tel: 801 0616)には赤松神父(修道院院長)、安芸神父(教会の協力司祭)、マシア神父(主として聖トマス大学勤務)、山中神父(六甲学院常勤)の4名が居住します。

(5) 「信徒の教会」が少しずつ始まっているという現実に合わせて、

聖書や教理についてのクラスも、4月から信徒が担当したり司会をする新しい講座が増えます。多くの場合テキストを使いながら、お互いに学び合い、質疑応答し、生活の中での信仰の喜びや難しさを分かち合い、また求道者を信仰にまで導くことが出来るように祈っています。

新年度の「教会報の巻頭言」も評議会の議長・副議長3名の方々に信徒としての信仰を表明すべく執筆していただくことになりました。

養成部が教会全体のために主催している哲学講座、秋の聖書講義、祈りの道場(黙想会)等にも参加して、信仰を深めましょう。

桜井神父個人はまだ1年間神戸地区長の仕事があるので、外部での勉強会以外はクラスを持たないことにしました。

各 部 会 だ よ り

👉 婦人会

4月より新役員へバトンタッチ致します。新役員をご紹介致します。

会長：森川さん 副会長：前田さん

会計：小山さん・志田さん

書記：天木さん・河野さん

以上、6名の方々です。

この1年、皆様のご協力とご支援ありがとうございました。役員一同心より御礼申し上げます。

【聖堂清掃】

3月 1日(土) 教会学校

8日(土) 午前2班

14日(金) 東1・2・3

22日(土) 午前3班

👉 三日月会

【例会】 3月17日(月)

14時～ミサ

講演 三浦優子氏「グレゴリオ聖歌」
ビデオ鑑賞

【三日月会喫茶】 3月2日(日) 9時ミサ後～
13時 イグナチオホール

👉 青年会

3 / 9(日)、23(日) 12:30～

第5会議室

内容：親睦会準備と分ち合い等

初めての方もお気軽にご参加下さい！

👉 教会学校

3月1日(土) 大掃除

3月8日(土) 終業式・卒業式(プチトマト公演)

3月9日(日) こどもと共にささげるミサ
(ミサ後プチトマト公演)

👉 社会活動部

3 / 7日(金) 10:00～ 社会活動部連絡会

初金ミサと十字架の道行き終了後。第2会議室

～ 墓地委員会より～

墓地委員会では墓地の安全性を図るため、墓地の危険箇所の安全基準を検討中です。特にB地区(摩耶山方向に向いている地区)の最下段の2箇所は最危険箇所であることが判り、安全手摺、拡張通路の設置をしました。安全基準設定後はその他の危険箇所の安全対策工事をする予定です。



< 石垣側 >



< 通路側 >

<お 知 ら せ>

【社会活動部より】

3 / 5 (水) 10:00 ~ 手芸の集い (第1・2会議室)

どなたでも参加ご自由です。

3 / 8 (土) 10:00 ~ 炊き出し (イグナチオお台所)

小野浜グラウンドにて配食や、おじさんたちとのお話し相手だけでもOKです。毎月第2土曜日。

3 / 8 (土) 11:30 ~ シナピス神戸 “ 静修会 ”

聖ヴィンセンシオ愛徳姉妹会において。詳しくはちらしをご覧ください。

3 / 13 (木) 14:00 ~ ベタニアの集い (イグナチオホール)

聖体拝領式と茶話会

3 / 16 (日) 手作りコーナー

3月の手作りコーナーは都合によりお休みさせていただきます。4月20日(日)は開催予定です。

3 / 21 (金) 14:00 ~ おにぎり作り (イグナチオお台所)

須磨方面夜回り支援

【お台所を使用される皆様へ】

三日月会有志(ご婦人)の方がお台所を大変綺麗にお掃除下さいました。感謝致します。
台所使用后、下記の点をお守り下さい。

- ・使用したものはもとの場所へ。
- ・生ゴミを捨て、流しを洗う。
- ・床の掃除。(掃除用具は倉庫にあります。)
- ・ガスの元栓、エアコン・給湯器の電源の確認。

(婦人会)

図書紹介

「最後の授業」 ドーデ作 ポプラ社文庫

わずか十数ページの短編小説はプロシャ(ドイツ)の占領に伴い禁じられたフランス語の最後の授業を受けるアルザス・ロレーヌの村のひとりの少年の目を借りて描かれています。僕がこの短編と初めて出会ったのはかれこれ五十年も以前の中学の国語教科書の中で、尊敬していた柳井先生が「良く出来ている書き物だ」と書評されました。その後語学学習用の英語の本を手にいれてからは身近にあって度々読んできました。なぜかページを開ける度に涙を流しながら言葉を追っている自分がいました。

今度妻の児童書の書棚にあるのを見つけ半世紀ぶりに日本語で読み直しました。四十年教えた学校を明日去っていく先生は「みなさん、わたしが授業をするのは、きょうが最後です。ドイツ語いがいのことばを、おしえてはいけないうことになりました。」と言って授業を始められます。「フランス語は世界じゅうでいちばん美しいことばであること。しっかりまもりつづけること。なぜなら民族がどれいになったとき、国語さえしっかりまもっていれば、じぶんたちの牢獄のかぎをにぎっているようなもの」だと思いの丈を語ります。

言葉の重大さによりやく目覚め始めた僕のバイブルに何時の間にかなっていたことに気づいたのでした。

(塚崎)



祈りの道場に参加して

今回初めて英神父様ご指導の「祈りの道場」に参加させて頂きました。祈りの道場では、まずは神父様がテーマの「十字架を担う」についての聖書の箇所を読まれ、十字架を担うとはどういうことかを聞き、祈りのポイントを教えていただいた上で黙想を行いました。これを4回行い、最後にミサに与りました。

4回の講話の中で一番驚いたのは、3回目までマタイの福音書を読まれていたのに、4回目はルカの福音書を選ばれたことでした。十字架は“イエスが望むもの”、“イエスと共に担うもの”で、キレネ人のシモンのように自分が望んで得るものではなく、与えられるものであること。そしてそれはイエスの苦しみを担う榮譽、苦しみを分かちあえる喜びであることを教えていただき、祈りを通して十字架を担う喜びについて深めることができました。

祈りの道場は正に“道場”でした。祈りの後、これほど疲れを感じたのは初めてでした。祈りとは、心と体の両方をつかってこそ深めていけるものであることを実感しました。4月からの新しい生活に向かう前に、このような恵みの時をいただいたことを感謝いたします。 (黒森)



シナピス神戸体験学習会 「みえないってどんなこと？」

寒風吹きすさぶ2月16日(土)午後1時より、垂水教会におきまして、シナピス神戸主催体験学習会「みえないってどんなこと？」が開催されました。視覚障害者への理解を深め、街で出会った時に声を掛け、多少の手引きが出来ることを目指して企画いたしました。厳しい寒さにもかかわらず30人余りの方が参加してくださいました。

はじめに、シナピス障害者デスク・フレンドリー副代表の長須剛さんから当事者としてのお話を伺いました。長須さんは全盲ですが、ひとりでどこにでも白杖をつけて行かれます。歩行が出来るようになるまでには随分こわい目にも遭われたそうですが、出かけることは楽しく、人と触れ合い、言葉を交わしたいと公共の乗り物を利用されます。街中で視覚障害者を見かけたら、“どこへ行かれますか？”、“お手伝いしましょうか？”と身なりに関わらず声を掛ける優しさを皆さんに持って頂きたいこと。教会の中でも障害者が得意な事を活かして参加できる場を与えていただきたい事をお話下さいました。時計、計算機、携帯電話、カードなどバリアフリーグッズの紹介もしていただきました。

続いて、神戸アイライト協会の森一成さんから視覚障害の種類、それに伴う困難な事柄、歩行方法等のお話を伺ったあと、ペアを組んでアイマスクをつけての手引きの体験学習を致しました。室内歩行に始まり教会の庭に出て坂道、階段を状況説明しながら、声を掛けながら交代に体験してみました。手引き者は右腕を貸し、常に一步ほど前を歩き、障害者が物に当たらないように配慮して、階段の前では必ず止まり、上りか下りかをはっきりと伝えてから動作を始める事を学びました。参加者は既に垂水教会の敷地内の様子を把握していたので怖いという感覚は余りありませんでしたが、全く知らない場所を白杖だけを頼りに歩くのは相当な不安があり、正しく手引きをして下さる方がいればどれほど心強い体験を通して理解できました。短い体験学習でしたが、参加下さいました皆様が視覚障害者に出会われたとき、勇気を出して声を掛けていただき、体験を思い出し、手引きをして下されば、そして、この体験に参加できなかった方にもお話を聞かせれば大変嬉しく思います。

シナピス神戸事務局 長瀬

聖書勉強会のご案内



毎月第1、第3木曜日の15時から16時30分までしております「聖書勉強会」からの現況報告です。私達はこの2年間ほど聖母マリアについて聖書を中心にいろいろ学んできましたが、2008年の復活祭の後からヨハネの福音を読みたいと考えましたので、まず、ヨハネの第1の手紙4章1節から16節を取り上げて読みました。ここでは愛について殆ど全てが語られており、ヨハネの論理が明快に述べられています。簡単に書きますと、

1) イエスは御父の面影を人間に啓示しようと、この世に来られ、2) 彼を信じる者は神の霊を受けて、愛の霊の住まいとなって、3) 三位一体の愛の一致の中に入れられ、パウロのいう「神の相続者」となります。4) 故に、人はイエスによって救われた者となり、源である神から愛を汲み取って人々と分かち合い、神を知る者となります。そうして、神が創造された通りの「神に似たもの」に変わっていきます。このヨハネの考えは私達がヨハネの福音を読んでいくのに役にたつだろうと考えました。もしヨハネの福音と一緒にひもときたいとお思いでしたらどうぞお越しください。このグループは10人ですが、六甲教会だけでなく、六甲以外の3つの教会からもいらっやっています。聖書を読みながら、お互いの信仰を育て、生き方を共に分かち合えましたら幸いです。

聖書勉強会一同（三輪）

“聖書と生活” 4 / 7 (月) 開講

“信徒としての働き” どうすべきか？自分に与えられている使命をどう果たすべきか？
神からのメッセージに耳を傾け、祈りの中で、神との語らいの中で、考えてみて下さい。

(教会報2月号コリント神父)

このメッセージを心にとめ、一人一人の信仰が、日常生活や、社会生活に繋がるようにと！聖書がわたしたちの信仰を養う糧となり、本当に栄養になるよう、聖書の言葉や信仰を正しく養うために、信仰と生活を分かち合う場で、具体的な経験を結びつけながら聖書を共に学びませんか？Fr ホアン・マシアにご指導頂きながら、皆さまと共に、4～6月第1・3月曜日に“ヨハネ福音書”からの箇所を読みたいと思います。(4月開講)

参加はどなたでも自由ですが、部屋の都合等もありますので、参加申込書等の詳細は後日ちらし等でお知らせいたします。



みんなの広場

カトリック聖歌集の活用を

私の幼少の頃は、聖歌はラテン語、日本語の併用だったと思います。その後、典礼聖歌が採用されてから、最初の頃はカトリック聖歌集と典礼聖歌集と半々位に歌われていたように思いますが、今日では典礼聖歌が主体となり、カトリック聖歌は最近、なおざりにされているようで、とても寂しく感じます。せめてもの、四旬節、御苦難、御死去、御復活祭の聖歌を採用されてもよいのではないかと考えています。「68 いけにえを」、「374 野バラのにおう」、「371 みつかいの」、「203 いざよろこべ」等、伝統あるカトリック聖歌集を、今年の御復活祭には私の一番大好きな「203 いざよろこべ」を元気な大きい声で歌い、御ミサに与りたいと希望しています。また福岡にいる頃、ラジオ放送「カトリックの時間」で、テーマ曲としてキリストの讃美「288 うるわしき」等も懐かしい曲だと思います。

(中口)

隠れた殉教者

2月14日の日経紙文化欄に小堀千明氏の「会津に隠された祈り」と題する記事が掲載されていた。会津地方のキリシタン遺跡の研究である。筆者は特定の教派に属さないプロテスタント教会の牧師であると思われる。プロテスタントの牧師にもこのような研究をしておられることを知って驚くとともに、宣教の一面に思いを馳せた。

殉教は主のみ言葉にあるとおり崇高な行為である。信仰に生きる者は常に信仰に殉ずる覚悟をもって生きなければならない。同時に信仰の伝承には隠れた面があることも忘れてはならないと改めて思った。

歴史を顧みると、徳川の迫害時代に信仰の最後の埋もれ火を守り続けたのは、所謂隠れキリシタンであったことを忘れてはならないし、無視できない事実である。「隠れキリシタン」というと、ともすれば卑怯者という印象を抱くが、弾圧の下に隠れて信仰を保つには通り一遍の覚悟ではできない、隠れた殉教と言っても過言ではない。

前世紀の戦時中に我々も信仰の先祖が体験したような体験をいくらか強いられた。強制されて宮城を遙拝しながら、心の中で頭を下げたのは「天に在す我等の父」であった。「君が代」の君は「天地の創造主全能の父」であった。公に歌うことができなかったカトリック聖歌 271 番は、我々の切実な祈りであった。周囲の教会から、あるいは少なからぬ信徒からも非難されながら、軍服帯刀姿で宮城遙拝の号令を掛けていたイエズス会の司祭がいた。その彼が修身の時間に講じた「教育勅語」は要するに「公教要理」であった。これだけがすべてではないにしろ、戦後その教育を受けた第1回卒業生をはじめイエズス会の或は教区の司祭招命に応えた者が相次いだことを忘れることができない。このような隠れキリシタンの行動の裏には、殉教も辞さない信仰が隠れていたのである。

今我々が生きている社会は、その実態は戦前戦中と本質的には変わっていない。隠れキリシタンの宣教も、宣教の一面として蔑ろにはできない。

宣教のために建てられた学校は、新たな受洗者は皆無に近い。児童館も失った。「釜が崎」「炊き出し」「生と死を考える会」「インターネット」など、「教会堂」の中に閉じ籠もるのではなく、「教会堂」の外に出なければならない、我々一人一人が生きている場も「教会堂」の外である、そこは主のみ名も口にしない隠れキリシタンの宣教の場である。「教育勅語」で「公教要理」を教える叡智と、揺るがない信仰が身についた行動がなければ宣教はできない。主は「あなたがたは行って、すべての人を私の弟子にきなさい」と弟子達に命じられた。「行って」である。更に「きなさい」と命じられた。「わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない」

(ヨハネ三好)

～ メルシュさん追悼文 ～

赤松神父

メルシュさんの心の宝物についてお話ししましょう。メルシュさんの心には、メルシュさんがとても愛した3つの宝物がありました。

第1の宝物は神様です。メルシュさんは神様を何よりも大切にし、聖堂の聖櫃の前に座って祈っているときが一番幸せなときでした。神への深い愛と信仰のルーツはメルシュさんの家庭にあったようです。子供時代のある日のこと、メルシュさんは教会をサボってサッカーをしに行きました。帰宅してそのことが母親にばれてしまい、きつくしかられたそうです。「お前は聖堂の聖櫃の前で祈ることがどれほど美しく素晴らしいことか分からないのですか」その母の言葉はメルシュさんの心のとても深いところに入りました。そのとき以来、死に至るまで、メルシュさんは母の言葉を忠実に守り、健康のときも病気のときも聖櫃の前で祈っていました。私はこの16年間、メルシュさんと共に生活してきましたが、メルシュさんから学んだ最も大切なことは、この神への愛と祈りの心でした。メルシュさんの人となりで、最も優れた点は何かと問われるならば、深い信仰と神への愛であると答えることができます。

2番目の宝は何でしょうか。それは人々です。メルシュさんとかかわりのあった人々です。どうして、これほどたくさんの人々がメルシュさんを愛し、少しでも話をしたいと訪れてくるのかとても不思議です。訪れる人を暖かく迎え、もてなし、話を聞きました。母の会の方たちがしばしば木工所にメルシュさんを訪ねて来られましたが、2時間でも3時間でも一緒に付き合いました。メルシュさんはどうしてこんなに多くの人に愛されたのでしょうか。こういうことではないでしょうか。メルシュさんは自分の所にやって来る人のうちに容易にその人の中にある美しい点、輝いている点を見出すことが出来たのではないのでしょうか。だから人々はメルシュさんのところに行った時、私たちの中にある良いもの、美しいものに気付かされ、喜びを感じ、力を与えられて帰って行ったのではないのでしょうか。メルシュさんはイエズス会の宣教師です。ミサを立てたり教壇に立って教えたりすることはありませんでしたが、神父たち以上に雄弁に、また多くの人に神の愛を伝えていったのではないのでしょうか。

3番目の宝は六甲学院です。出来たばかりの六甲学院に派遣され、新しい学校作りにすべての力を注ぎました。メルシュさんは六甲学院が大好きで、六甲学院なしにメルシュさんの生涯は考えられません。しかし同時に、メルシュさんなしに、現在の六甲学院は考えられません。そのぐらいにメルシュさんの足跡は大きいと思います。すべてのものは過ぎ去り、そして消えて行きますから、メルシュさんの作った机や椅子はやがてなくなってしまうでしょう。しかし武宮神父とメルシュさんの働きは後々まで語り継がれるだろうと思います。メルシュさんはいつも六甲学院の保護者や先生方や生徒たちのことをほめていました。訓育の仕事で走り回っている先生方や訓育生を見て感心しておられました。メルシュさんが唯一気に入らなかったのはイエズス会員です。今のイエズス会員の働きを見て、しばしば落胆し、憤っていました。「イエズス会員は一度これをやると決めたら最後まで徹底的に遣り通すんだ」確かにメルシュさんはこの六甲学院に生命をかけました。イエズス会を愛し、六甲学院を愛するメルシュさんから見たら私たちの働きは中途半端でふがいないというように目に映ったんだろうと思います。

残された私たちは力のないたよりないイエズス会員ですが、天国のメルシュさんの祈りに支えられて出来る限りの力を注ぎますので、どうぞ今までと同じように私たちのためにお祈りください。

この文章は、1月28日に亡くなられたBrメルシュの葬儀ミサの中で赤松神父がお話されるために用意されたものです。

主任司祭の地平線

いつの間にか梅の花がほころび、そのうち木蓮や桜の蕾も今度は私の番よ！と言い出しそうな時期になりました。自然の営みは力強く、新しい命への希望を感じます。子供たちは学年末を迎え、一学年上へと、また上級の学校へと希望を抱く時ですね。卒業して社会に羽ばたく青年たちもいます。会社では人事異動の季節を迎え、この教会でも転勤のためお別れするご家族や、新しく転入して来られる方々もいらっしゃるでしょう。一人ひとりの人生は変化の多い旅であり、外面においても内面においても、波瀾万丈の旅であると思います。今春は、司祭・修道者にも異動がありますが、その方々の人生もやはり旅であり、永遠へと向かう希望の旅を証していると思います。

「何事にも時があり・・・、神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神は永遠を思う心を人に与えられた」(コヘレト3章)。私たちの人生 その信仰の旅 は、救い主イエス・キリストが十字架の苦しみを経て新しい命へと過ぎ越された救いの出来事と重なり合っています。この四旬節の間、私たち地上を旅する教会はイエスの受難と十字架上の死を黙想しながら歩んでいる、旅の途上にあるのです。その旅の道すがら、愛と犠牲と施しの業を実践しながら、“信仰の現実”(即ち、福音的な生き方、謙虚さ、思いやり等)が少しずつ自分自身の中で成長して行くように祈りましょう。

教会報4月号の発行は、3月30日(日)です。

編集会議は3月23日(日)です。

記事原稿は、3月16日(日)正午までに信徒会館事務室へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21

電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6

発行責任者 桜 井 彦 孝 神 父

編 集 広 報 部